

## 目次

## 〔1〕内容のとらえ方 1

- 1 日本の秩序史における天皇—ある本質的事柄 1
- 2 制度としての祭祀と言説 1

## 〔2〕日本のあり方とその傾向 1

- 1 「風土」と「小国」の「島国」日本の特徴 1
- 2 何かへの受動的通路としての天皇、天照の非男性・女性的包容性 2
- 3 天神地祇、祭祀の形成史 2

## 〔3〕古代日本——内外の関係における形成史と天皇 2

- 1 縄文文化 2
  - 2 弥生文化 2
  - 3 古墳文化とヤマト国家 2
  - 4 仏教また言説を含む形成史と天皇—6～7世紀 2
    - (1) 低層・周縁を救済した浄化する論理の仏法 2
    - (2) 『十七条憲法』『大化改新』7世紀前半 3
  - 5 天武天皇(在位 673～686)以後の天皇中心文献: 古事記と律令制・日本書紀 3
    - (1) 律令制の具体化—7世紀後半から8世紀半ば 3
    - (2) 「古事記」と「日本書紀」 3
    - (3) 律令制と神祇・僧尼 3
- ◇新嘗祭の展 3

## 〔4〕近世日本の世俗化での様相と天皇 4

- 1 言説また生活形成の近世と天皇 4
  - (1) 日本の世俗化の内実 4
  - (2) 日本的祭祀の基本型 4
  - (3) 発生している問題 4
  - (4) 背景としての朱熹の言説 4
  - (5) 日本での動向 5
- 2 前期、17世紀朱子学と神道との融合、日本化・陽明学化 5
  - (1) 戦国期における天皇・伊勢神宮の上昇拡大 5
  - (2) 林羅山(1583-1657)「朱子学」と「神道」 5
  - (3) 度会延佳(1615-1690)また山崎闇斎(1619-1682) 5

- (4) 脱朱子学・陽明学化 中江藤樹(1608-48)・熊澤蕃山(1619-91)、山鹿素行(1622-85) 5

## 3 中期、漢・和と天皇 5

- (1) 伊藤仁斎 5
- (2) 荻生徂徠 5
- (3) 本居宣長 6

## 4 後期・幕末、危機・完成と天皇 6

- (1) 後期水戸学 6
- (2) 横井小楠 6

## 〔5〕近代初期・大日本帝国の哲学と天皇 6

- 1 西周(1829-97)の哲学形成 6
  - (1) 哲学関連用語の形成・広がり 6
  - (2) 「哲学」の意味はなにか、なぜ「哲学」語だったか 6
  - (3) 「哲学」西周の定義 6
- 2 日本哲学のさらなる変容 7
  - (1) 明治二十年代半ばの二つの中心的な哲学 7
  - (2) 「大学」における「哲学」・「法」「文」「理」からの分離  
「文」からの政治学・経済学の独立と「法」の支配下 8
  - (3) ドイツ学の文理一般的上昇 8
  - (4) 学問・哲学の動向 8
- 3 大西祝・岩下壮一などからの社会哲学の重要さ 8
  - (1) 大西祝(1864-1900) 8
  - (2) 岩下壮一(1888-1940) 9

## 〔6〕敗戦後に発生した状態と課題 9

- (1) 「近代天皇像」β 9
- (2) 「近代天皇像」α 9
- (3) 平成天皇また皇后の活動: 9
- (4) 敵味方供養、怨親平等 9
- (5) 「近代化」批判とその後、9
- (6) 今後の課題 9

## 〔1〕内容のとらえ方

### 1 日本の秩序史における天皇——ある本質的事柄

生活される物事の全体をいま文化と称する。その物事には、秩序がありまた言説がある（〔1〕の次2. 参照）。そして日本の秩序の特徴の一つの重要な事柄は、天皇が深く関わる長い歴史だということである。ただし、それは時期を帯びた形成物としての秩序での事柄であり、時代時代と同じではない。だから、それは（ある程度の傾向や様相はあっても）まったく不定なものでは決してない。

この事柄を、より真理に向け理性的にとらえようとするなら、それは無視してしまってもいいのでも、また一定に決めてしまうのでも、ない。ならば、それをどうとらえればいいのか。それは真理・理性といったことが何かに結局は帰する。それを詳細な物事とすることもできる。ただ、そこに入り込むだけなら、必要であっても、史実だけであって、それだけなら意味がみえない。なぜなら、それはどうも歴史的な形成物なのだから。その意味を持った歴史的な形成物は、結局は、天地自然観・万物ともいべきものによって位置づく、と本稿では考えている。これは中村桂子（1936-）また彼女に考察を与える哲学・大森荘蔵（1921-97）による。\*1 中村・大森。

ここから決議論（casuistry）に似るような大体の把握が出来るだろう。おそらくそれは天人相関観ともいべき 19世紀まではあった物事から来る、と考える（〔4〕また〔6〕参照）。そこにまた、日本史上の秩序といった形成物での天皇は関わる、とまた考える。以下、そのあたりを歴史を遡りながら大掴みに見出したい。

### 2 制度としての祭祀と言説

では秩序を何によってとらえるか。日本において重要だと考えられる天皇また神道は、言説をとらえることもある程度必要だが、実はそれでは足りない。なぜなら、それは、言説以前の、祭祀となる制度としてまずあり、そこから言説もまた追って後に形成されるからである。日本の秩序では言説よりも祭祀となる制度をまずとらえる。\*2

むろん後の言説がまた祭祀にさらに影響することもあり、長く結局はその両方をみるべきである。ただ、天皇また神道の場合は、祭祀>言説の傾向が大きい。だからここでは、祭祀となる制度をまずとらえ（〔3〕古代）、追ってまた言語化をとらえる（〔4〕近世）。そこから大日本帝国における制度的言説（〔5〕近代）また戦後の象徴的祭祀（〔6〕現代）をみる。

\*1 中村桂子は、ジェームズ・ワトソン『二重らせん——DNAの構造を発見した科学者の記録』の最初の訳者だった1968年。後に大森荘蔵1985『知の構築とその呪縛』に学んで生命の歴史「生命誌」の曼荼羅や物語を描く。

\*2 時代や場所を孕む形成物は、秩序とっていいが、ある程度決まった形態となり、前後周囲に関係する枠組みになるとき、これをいま制度と呼べる。この考えの基礎として \*資料01 和辻・三木の三木。

## 〔2〕日本のあり方とその傾向

### 1 「風土」と「小国」の「島国」日本の特徴

・日本は、大きな大陸ではなく、島の外と交流しながらもある閉じた空間である。交流がありながらも纏まりがよりある場所である。そこにはどんな傾向があるのか。

・和辻哲郎1935『風土』によれば、それは沙漠地（中東）や牧場（西欧）とはちがって「モンスーン」（アジア）であって、生命の充実感がある。またその中で日本は、インド・中国とはちがって時空の詳細・瞬間性がある。

この点をまた李御寧『縮み志向の日本人』講談社文庫、1984でも指摘される。

・そこにある「精神」について、和辻は次のようだった、と和辻哲郎が指摘している。

「外国崇拜」「感受せるものに対し自己を空しゅうして学び取るという謙虚な態度」

・ただそれが何なのかを反省して「歴史的に（充分）知ろうとしなかった」 \*資料01：和辻「日本精神」七

外部・時空への依存性があり、思考よりも当の場面への直観の方が強い。知・反省があとになる、

傾向がある、という。

## 2 何かへの受動的通路としての天皇、天照の非男性・女性的包容性

- ・この纏まりがある島国に、「天皇」が形成される。
- ・ただし、その日本の天皇の性格は、主体的というより受動的・通路である、とする。

\*資料02：和辻「日本倫理思想史」など

ベン＝アミー・シロニー2003『母なる天皇：女性的君主制の過去・現在・未来』大谷堅志郎訳講談社2003.1

- ・「権威」と「権力」に分離し、前者に天皇を、後者に武家・政治家をとらえる。Emperor(皇帝・帝王)ではなく、法王(The Pope 権威者)だとみる。

\*資料01：和辻「日本精神」一

## 3 天神地祇、祭祀の形成史

- ・ただ、和辻の分類は、無・空に向かう全体論であって、権力と違う権威の地平が何か証明できていない。
- ・具体的に天皇が神祇形成される制度にあることが(無意識か)あまりとらえられていない。尊皇攘夷永遠論に近い。
- ・また天神地祇なのだから、秩序をほぼ古代に完成したのが天智天皇だといわれまた産霊があるのだから、こうした天地の意味がより必要だろう。以下、天地における(祭祀)形成史をみってみる。

### 〔3〕古代日本——内外の関係における形成史と天皇

\*資料00：略年表

#### 1 縄文文化

縄文期(1.3万年～前300頃)は「成熟せる採集(さいしゅう)民文化」

佐々木高明 1986『縄文文化と日本人、日本基層文化の形成と継承』→講談社学術

谷川徹三 1971『縄文的原型と弥生的原型』岩波 1971.10

- ・天地の偉大さ、日月、その光や水や生物への畏敬。
- ・祭祀あつての人間。共同体中心の母胎としての土器。
- ・アイヌ、沖縄に似るものが基層のように個々に展開していただろう。未階級。分散。
- ・それらのより秩序化が後にさらに行われる↓。「天照」「星座」「産霊」信仰へ

#### 2 弥生文化

弥生期(前300～後300半)は、稲作を所有する渡来人が介入して支配とも関係して形成したただろう。

銅鏡(どうきょう)・銅鐸(どうたく)・銅剣さらに銅矛(どうけん・どうほこ)

「鏡」天・光・中心、ただし副葬品としても。

「鐸」楽器・音、鈴のような内の珠(鐘かねとは違う)。やがて珠をならずより象徴が強い。近畿中心。天皇方向  
→勾玉(まがたま)になるのでは? 「剣」は、より対外的・戦いに関わるが、鏡への結集が行われるのだろう。

#### 3 古墳文化とヤマト国家

・古墳文化(3世紀半～7世紀)

氏族の発生、畿内への中心化と[

「前方後円墳」「埴輪」(はにわ)

→現代的「墓」よりも、用語としての「墓(こう)」包摂的なものさらに上位化するもの(「かむあがる」)、そこに関係者が与るもの、と考えられていた。下層においては「死」だが――。

#資料03：上昇・包容論……中村禎里 2011『生命観の日本史 古代・中世篇』参照

また加藤千恵 2002『不老不死の身体―道教と「胎」の思想』に似るかもしれない。

#### 4 仏教また言説を含む形成史と天皇——6～7世紀

##### (1)低層・周縁を救済した浄化する論理としての仏法

この在り様を、『日本国現報善悪霊異記』景戒(9世紀ころ完成)が示す。

## (2) 『十七条憲法』『大化改新』7世紀前半

- 29 欽明 537、蕃神（あだしくにのかみ）vs. 国神（くにつかみ）  
30 敏達 538、31 用明 538、32 崇峻（すしゅん）  
33 推古 594 「三宝興隆（こうりゅう）の詔」、諸臣の造寺  
603 「十二階」 徳・仁・礼・信・義・智  
604 「憲法十七条」推古天皇十二年（六〇四年）四月  
607 「神祇崇拜の詔」 #結び付いていることを無視できない  
35 皇極 645 大化改新（仏方祭祀天皇へ）薄葬令（はくそうれい）：墓・葬儀の規模を制限。  
#7世紀には、仏法の上昇があるが、葬儀の減少でもあり、それは神祇の上昇・中心化にもなっている。

## 5天武天皇（在位673～686）以後の天皇中心文献：古事記と律令制・日本書紀

#天皇のもとでの結集が図られるが、天皇自身の政治・経済的な支配とはいえない。神祇に分化してそちらになる。  
・完全に不可測ではない。動いている生命観・論理また占いなど

### (1) 律令制の具体化——7世紀後半から8世紀半ば

- ・元来稲作の祭りだが、それが拡大するとともに変容、大嘗祭では特に一代の祭りともなる。  
資料06 律令制と稲作・天人相関。
- ・天皇の娘が代理人ないし使命を預かり持続する媒体たる「齋宮」として伊勢に在位中、趣く。資料05：齋宮  
「大嘗祭」→「踐祚大嘗祭（せんそだいじょうさい）」（天皇即位儀式）
- ・藤原不比等（659—720）とその子孫が律令の編纂にあずかる。瀧川正次郎 1988 ↑『律令と大嘗祭 御代始め諸儀式』
- ・種族と天皇の結合。同族の中臣氏また忌部（いんべ）が、祭祀をつかさどる。動き続け広がる陰陽道・密教など。

### (2) 「古事記」と「日本書紀」

資料04 古事記・日本書紀

- ・記「古事記」は内部での天照からの系統・関係を示す物語として、紀「日本書紀」は外部への応対や支配に、用られたのだろう。紀は、神代を列挙するが、あとは、十干十二支（じっかんじゅうにし、60周期）を用いて、またその後、あわせて「六国史」となる（日本書紀・続日本紀・日本後記・続日本後記・日本文徳天皇実録・日本三代実録）。
- ・記「古事記」、内容に、女性を基礎にもっている、稲作の形とともに秩序化と収斂が始まる、と考えられる、このありさま・依存的、産霊（稲作）が基礎となる。資料02 和辻通路、04 剣の献上、疫病への天皇の天神地祇・各地祭祀
- ・これらが、律令制での神祇令にも関係する。資料05 光明・貞明皇后、資料06 稲作

### (3) 律令制と神祇・僧尼

#### ◇あり方と歴史

資料05：律令制

- ・制度としての律令制は、「一君万民」かというそうではなく、「地方豪族たちの伝統的な地域支配権」の「総括」だっただろう、（石母田正「在地首長制」）。また疫病・供養などもあったが仏教が担ったかもしれない。
- ・11世紀ぐらいから充分行われなくなった。齋宮も、13世紀ほどまで。
- ・しかし、種（位）の支配としては、変化を持ちながらも、持続し続けたといえる。現代でもそうである。

#### ◇新嘗祭の展開とそうでないもの

- ・律令制にあたるものは、違いはあれ、各王朝で展開しただろう。種族主義としても展開する。  
この種>徳 の構造 資料5 野村忠夫のカバネ論参照
- ・神祇令関係の展開については、三橋正 2010\_日本古代神祇制度の形成と展開\_法蔵館 2010.2 を参照。
- ・新嘗祭にあたるものは、天皇に結集しなくても沖繩にも見出せる、という。  
谷川健一『大嘗祭の成立 民俗文化論からの展開』小学館 1990、『日本の神々』岩波新書 1999、  
千田稔 2005『伊勢物語：東アジアのアマテラス』中公新書 1779, 2005.1

## 〔4〕近世日本の世俗化での様相と天皇

### 1 言説また生活形成の近世と天皇

#### (1)日本の世俗化の内実

- ・「近世」と日本で称される時期は、戦国期と称される戦い、とくに仏教やキリシタンとの戦いを経て、武力による統一が発生した時代。 刀狩り（豊臣）、禁教令（徳川） cf. →徳川の平和（Pax Tokugawana）
- ・諸宗教が権力と結び付きながら一般的に位置づき・ひろがる。

尾藤正英「日本における国民的宗教の成立」『江戸時代とはなにかー日本史上の近世と近代』1992

資料09：近世日本の宗教。オームス。禁教令。

#### (2)日本の祭祀の基本型

- ・具体的には、寺院の宗門改め（住所録管理）式。神社の誕生結婚生産等の祭り、そこに天下学としての儒学。
  - p 神道（神信仰）：生殖や豊饒、生の成長・増進、宮参り、成人式、収穫祭などの寿ぎ
  - q 仏教：死および霊威・凶事の鎮め〔葬儀・祈祷〕慰撫・救霊・成仏・往生
  - r 儒学：漢学、外来語による文化価値。後天的・人為的な社会形成、教育・学芸、処世・治世
  - x 邪神・基
- ・対抗的 x をもつことにおいて、近世的統一を形づくる。しかし x は外化される物語化。

仏 ← 儒 ← 神

|

└───┬───┘

基

祖霊：死自体がない、基の側からの「偶像」

怨親平等、水子、間引き、供養、往生

文学における「怪談」 天草四郎・「歌舞伎」

#### (3)発生している問題

- ・「受難」「殉教」が否定的なものとなる世俗化。（キリスト教やイスラム教また元来の仏教の持つものとは違う）  
それがどうなるのかが、日本では、維新・明治初期、戦時中戦争直後に課題となる。
- ・近世における「天」  
諺として「非・理・法・権・天」であった。そこに威力が働きながら言説の運動が展開する。

参照：瀧川(たきかわ)政次郎 1964 『非理法権天』 青蛙房

- ・言説の中心的活動として、まず儒学、追って国学。

儒学について、渡辺浩 1985 『近世日本社会と宋学』、黒住真 2003 『近世日本社会と儒教』

威力の在り方：渡辺浩 1997/2016 増補新装 『東アジアの王権と思想』、同 2010 『政治思想史 十七～十九世紀』

- ・天地と威力とがどうなるか。

天地は、超越的な天また農業とも結合する活物・地でもあり、それと武威とがどうなるかが、近世史の問題。

これは、漢語朱子学用語の「理」「気」ともなる。理・気がどうなるかが問題となる。

結論的にいうと、日本史では、気>理の傾向が大きい。中国・朝鮮の理>気に較べて。

→幕末・明治への問題

#### (4)背景としての朱熹の言説

◎天地観におけるテキスト

易・書・詩・礼記・春秋

(五経)

↓

朱熹： 大学・中庸+論語・孟子 (四書)

→四書五経

◎『易』→太極図・太極図説→太極図解・太極図説解

資料08：易・太極図説解

『太極図』→「太極図説」：周敦頤（しゅうとんい 1017-1073）→「太極図解」「太極図説解」：朱熹（しゆき 1130-1200）

朱熹：「陰陽」「五行」が既に用いられているが、これに「理」を結び付けまた「聖は学ぶ可きのみ」とする。

特に「繫辞上傳」の「太極」をとくに立ち上げ、これにみずから「聖人」たるべきとして「陰陽」「理」を合一。

◎『四書』を作り特に『大学』からの「平天下」に至るプロセスを強調（『大学 朱熹章句』）：

三綱領（明明徳・親[新]民・止至善）

八条目（格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治国・平天下）

◎修行論における理と気、また理の性格

①理>気 での一体化。

「格物致知」からさらに、「人心の霊」、「窮理」（格物補伝）また「居敬」による「一旦豁然」「全体大用」。

「学者の工夫は、ただ居敬・窮理の二事に在り。此の二事は互いに相発す」『朱子語類』巻九

②「所以然の故」（根源理）と「所当然の則」（個別理）、共に至りうると主張。資料08：所以然之故と所当然之則

→西洋：ライプニッツ（1646-1716）、ショーペンハウアー（1788-1860）、リヒアルト・ヴィルヘルム（1873-1930）、  
ユング（1875-1961）、ハイデガー（1889-1976）、ヴォルフガング・パウリ（1900-58） など。

## (5)日本での動向

- ・日本では、こうした言説を背景にしなが、手元と現実と関係付ける傾向が強い。
- ・理<気、活物観の拡大。
- ・自立性・主体性を強調するより、他者・聖人観を強調しながらその本で経験主義に集束する傾向が大。
- ・神道のもとで気が活物さらに産霊として展開する傾向が日本では多い。

## 2前期、17世紀、朱子学と神道との融合、日本化ないし陽明学化

(1) 戦国期における天皇・伊勢神宮の上昇・拡大

吉田兼俱（1435-1511）『唯一神道名法要集』

(2) 林羅山（1583-1657）「朱子学」と「神道」

(3) 度会延佳（1615-1690）また山崎闇斎（1619-1682）

「朱子学」を最も感得しこれを「神道」の秘伝・日本書紀と結合（垂加神道）。

漢文をもとに朱子学と大和秩序〔日本書紀〕との結び付けを完成（ただし幕府批判を含むので公開は朱子学だけ）。

(4) 脱朱子学・陽明学化

中江藤樹（1608-48）・熊澤蕃山（1619-91）、山鹿素行（1622-85）

## 3中期、漢・和と天皇

(1) 伊藤仁斎

- ・最初、朱子学に進み続け論文をいくつも作るが、27歳頃、喪失観に落ちいて隠居、修行する。
- ・朱熹、仏教などの体験による虚無観の実感→ 翻って 活物観をあらためて実感する。 Cf. 白骨観法
- ・生命体験と日常性の意義強調
- ・一元気論。気>理
- ・実践からの仁・愛 vs. 虚無・残忍
- ・俯瞰した至極の祖述と伝播、古今歌 #京都町人として習慣的・日常的の普遍化。

(2) 荻生徂徠

- ・江戸の幕府・医者の子、
  - ・少年期、一端医者だった父が職を解かれて南総に流れる。共に体験。  
20代後半に江戸(市井)に戻り、仕官 / 御用。
  - ・風俗・習慣の変動を体験・認知する。→ 改めて世俗だけでない秩序形成を構想する。
- 古今・和漢に通じる、秩序を聖人の作為した古代また三代（夏殷周）に見出し、それを、手元にも関係付ける。
- ・殷からの伝播が奈良時代にある程度ある、とも捉える。 白川静（1910-2006）も同感。
  - ・三代からの伝承ないしそれをモデルにする考えは、近世末・維新初期までは日本史に流れている。→小楠

### (3) 本居宣長

- ・堀景山 (1688-1757) [京都の儒者で、徂徠と交流しつつも「天下の治には武威よりも徳、神武天皇、天照太神、皇統・血統」を主張する『不尽言』から漢文を学ぶ。
- ・『古事記伝』は、実証的であるが、その序である「直毘靈」では、天照大御神の秩序への随順を強調する。→公刊。
- ・漢文・唐文批判、古事記>日本書紀
- ・一般に大きく受けたに違いない。

## 4 後期・幕末、危機・完成と天皇

#以上から、

- ・幕府批判として、農本主義や礼楽形成論を行う、安藤昌益 (1703-1762)、竹内式部 (1712-67)・山片大弐 (17245-67)、また陽明学的活動をする大塩平八郎 (1793-1837) が広がる。神道に関係した多くは弾圧される。
- ・幕末には大きくは二つの流れが広がった。

### (1) 後期水戸学

- ・藤田幽谷 (1774-1826)、会沢正志斎 (1782-1863)、藤田東湖 (1806-1855)
- ・正志斎は、『新論』はつきりと「国体」を論じて、「神州」「皇化」「万国の綱紀」を主張する。

### (2) 横井小楠

- ・「議論相成」からの「国是」をとらえる。
- ・「三代」をモデルにする。
- ・天地への合一・共鳴を図る実践論。
- ・耶蘇教を、当初、仏教の一派ととらえ且つ深みを増したもの、とみる。
- ・「五箇条の誓文」への弟子の影響。

資料10：五か条の誓文と宸翰

## 〔5〕近代初期・大日本帝国の哲学と天皇

### 1. 西周 (1829-97) の哲学形成

#### (1) 哲学関連用語の形成・広がり

1873年頃には、西周、philosophy の訳語としての「哲学」、さらに「主観・客観」「理性・感性」「観念」「先天・後天」「総合」「分野」「概念」「肯定・否定」「実体」「命題」「定義」等の多くの語を作成。

1877年、「大学」東京大学文学部、その第一科に「史学、哲学及政治学科」作られる

1881年、井上哲次郎 (のちの東大の哲学主任)『哲学字彙』(学術語を定義する書)を作成、また関連語が広く定着する。(ただし、philosophy に対して「哲学」だけでなく「理学」の訳語も併用)。だったが。

#### (2) 「哲学」の意味はなにか、なぜ「哲学」語だったか

1861年、西士の学で種々の科学東土で儒、西洲でヒロソヒというが、天道を明らかにして人極を立てる点でどちらもその本質は一つだったという。ただし、「哲」関連語を調査・引用する。

周敦頤 (茂叔)『通書』志学章第十「聖希天、賢希聖、士希賢。……」

詩、「世有哲王」(大雅、下武)、「明且哲」「靡哲不愚」「哲人」(小雅・大雅に多出)

書、「殷先哲王」(酒誥)

禮記、「哲人其萎乎」(檀弓、上)

#### (3) 「哲学」西周の定義

1862年に、philosophy は「賢きことをすき好む」「賢哲を愛する」、philosophy を「希哲学」とする。

1873頃成稿 (未刊)、西周『生性発蘊』、1874刊、西周『百一新論』より。

「哲学」の語が表明された初出 1873 『生性発蘊』には、philosophy をめぐりほぼ次の考えが見える。

- ① philosophy は、philo-sophy (愛+智) すなわち「愛賢」である。
- ② philosophy は「後世の習用にて専ら理を講ずる学を指す」だが、「理学」は直訳になって他と紛れやすい。「哲学」と訳したのは「東洲の儒学と区別するためだ」。

↓

・「理学」では儒学あるいは個々の理学と解されかねない。そうではなく、「百一」「生性発蘊」という用語に見えるように、意味を動的に総合するものを「哲学」とした、といえよう。

・儒学・朱子学では、自己修行と聖人が主張される。しかし西周は、「観」「総べ論ずる」「兼て教えの方法を立つる」百一的全体として哲学をとらえる。誰もが修行しなくても関与する総合的な観、総論だと西周は哲学を考える。

・その枠組み・全体性はどうか。西周は、天道・人道は残すが、聖・希・賢は用いない。いわば誰もが関わる経験主義的な総体のように「哲学」の本体をとらえそれがまた「天道人道」とも重なっている。

その際、朱熹自身や新プラトン主義のようであれば、人間は「一者」としての「理」に向かうのだが、それは述べない。そこには理学より経験主義をとる点で、若い時からの共感することもあった徂徠学に似るといえる。ただし、聖人はいない経験論なのである。

・天地に位置づく経験主義的な学問の総体として彼の「哲学」があり、それと関連し種々の多くの用語も形成される。

## 2 日本哲学のさらなる変容

### (1) 明治二十年半ばの二つの中心的な哲学

・この全体的な哲学は、宗教的にはどうか。彼は宗教的次元への期待をも早くから持っていた。実際、西周は、オランダ留学中に神学への関心を述べたフリーメーソンになったと記録もある。とはいえ、そこにあるのは迷信的あるいは従来の宗教や思想のような「悟り」ではない、一種合理性をともなった宗教的次元、そうした天地ともかかわる総合である。それは朱子学的には、「所以の故」ともいえるだろう。

・1883年(明治十六)頃には「真神の有無は、哲学完全[になる]の日を俟つて而して後に識るを得べし。真成の宗教亦この時にあらずんば成立するを得ず。……万物の起源、真神の有無、哲学唯[哲学だけが]之れを窮むるを得べし」(高田早苗「実物学派の問いに答ふ」とある。

1884年(明治十七)学術団体「哲学会」。西周。そこでは、多くの分野、仏教、インド哲学、心理学、易、キリスト教、政治学など様々なものが扱わう。

↓

・1887年には、機関誌『哲学会雑誌』創刊号(1887)、井上円了(1858-1919)

「哲学は学問世界の中央政府にして諸学諸芸の根柢なる所以ならびに之を講究するの必要と其のよく文明を進め国益を助くる所以を知らしむべし」(「哲学の必要を論じて本会の沿革に及ぶ」)。

すなわち、西周の考える総合の学・文明の根柢の学だけでなく、学問界における「中央政府」「国家に有益」だという点が結び付いて強調されることにもなっている。

### (2) 「大学」における「哲学」

・「法」「文」「理」からの分離

1877(明治10)「東京大学」創設、学部は法・文・理。哲学は文学部の中心。

1879(明治12)文からの政治・理財学(経済)の別学科化。医学部。

1885(明治18)政治・経済の法学部への合体。理学部から工芸学部が独立。

1886(明治19)「(東京)帝国大学」の設立では、分科大学(college)は、法・文・理・医・工

1890(明治23)右同、農家を加え、法・文・理・医・工・農。

1897(明治30)「京都帝国大学」創設(理工、1898年に法・医、1906年に文)、「東京帝国大学」改称。

1919(大正08)東京・京都帝大で、法より経済学部を新設。

要するに、

①いわゆる「文科系」において、明らかに最初から「法学」が独立している。

②「文学」がその次で、「哲学」は文学においてある中心を占める。だが、それはいわば法制の下にある。③「理学」は、朱子学でも哲学でも全くなく、自然科学ないしその理論を指す言葉。

そのいわゆる「理科系」の学問は、哲学などの学から明らかに最初から外れその独立専門分野が益々増大する。



## 「文」からの政治学・経済学の独立と「法」の支配下

東京大学では、まず「法」「文」の分類があり、政治学・経済学(当時「理財学」)は、最初「文」の一部であった。それが拡大して別学科になり、1885(明治十八)年より法学部に合体する。つまり、政治・経済などが、哲学から分離し政治哲学・経済倫理などは主要なテーマではなく、むしろ法の支配下に位置づくことになる。

しかも、その法は、自然法ではなく、国家権力また大日本帝国と結び付いていく実定法である。要するに、「国家」としての威力の中心化に「法」さらに「文」も従属することになる。

### (3) ドイツ学の文理一般の上昇

初期にあつては、「大学」は英米を中心に仏を加えた人事・学問が行われた。

明治十年代半ば頃から、ドイツ学の導入が顕著になり始める。「学問」の編成の仕方が、「[国家主導] + [専門分化]」型になる。その傾向は国家主導の上位下達として国内で一般化する。



東京大学、1881 明治十四年頃から、管理体制が強化し、徐々に英語軽視、独逸語・独逸学重視また邦語重視の傾向が強くなる。加藤弘之初代東大総理は、「文学・理学ノ最モ旺盛ナルハ独逸国ニ若(シ)ク者ハ無之候」と述べている。また文部卿による上申書は次のようである。

- 一従来教授上用フル所ノ英語ヲ廢スルコト
- 一邦語ヲ用ヒテ教授スルコト
- 一所用書類ハ、国書訳書ノ外、主トシテ独逸書ヲ講究セシムルコト
- 一主トシテ独逸語學術ヲ採ルコト

### (4) 学問・哲学の動向

・議を欠いた専制的な上からの単純な論理が問題だという指摘は、そこにある学問・哲学とも関係する。

明治二十年頃から起こったこと：

まず学問分野において、法学での「国家学」、理工学での「科学」、文学での「観念論哲学や個別文学」が、おもな存在形態になる。法学部を中心に実際に「国家学会」が形成される(1887 明治二十年より)。ここでは、ドイツ流の国家中心に諸学を編成してとらえる Staatslehre/Staatswissenschaft が主流となる。また法制学中心で、政治学は独立性が弱いようである。それが日本の「官学」の傾向となって近代日本に広がっていく。

また文学科において、哲学の主な仕事は、いま観念論哲学と指摘したが、英米型の経験論やプラグマティズムの流れよりも、ドイツ型の観念論が主流となり、またひとつは、「国民道徳」イデオロギーになる。それに十分入らない詩文は、政治・社会とは無縁な私小説や個々の歌として好み営まれることになる。

・この事態は何によってか。そこに「国家」問題が当然にある。

- (1) 大日本帝国憲法、教育勅語が「臣民」をまとめる帝国ナショナリズム構造の中に哲学もある。
- (2) 明治初期・西周にあった天人相関観は、資本主義的運動によって無視されることになった。
- (3) 近代に発生する社会的組織の形成という問題は、自立的形成が弾圧され、国家社会主義ともいえる仕組みになった。そこには議論また決断の妥当な成立が失われることがある。

## 3 大西祝・岩下壮一などからの社会哲学の重要さ

近代日本の哲学の主流は2節の(2)(3)を、あまり課題にせずドイツ観念論になっている。ただ、それだけでない「可能性」も、いくつかの哲学に見出せる。

### (1) 大西祝 (1864-1900)

・大西には、同志社で10代からの影響を受けた神学に山崎為徳「天地大原因論」がある。天人相関論であり、天地自体に目的、因果をとらえようとする。

・東京大学哲学で博論を準備するも、指導教官となる井上哲次郎のドイツより帰国後、やめ東京専門学校[後に早稲田大学]教員になった。

・神学科に学ぶも、哲学に向かい、宗教をもとらえる哲学を見出し、またそこに「批判」の重要性をみる。

その批判はただ論理的であるだけでなく、歌論や詩歌論にもなる。カントでは、判断力批判(第三批判)美的・道徳的な象徴としての美の展開となる。三木清に似ている。

・良心、理性といった論文が強く描かれているが、それが失われていることから書かれている。

「宗教の社会的傾向」(1895M28年9月『六合雑誌』177)、「社会主義の必要」(『六合雑誌』191、1896 明治29年11月)をあらわし、宗教および社会の国家に収斂しない自立性が大事だ、と主張した。ただ、早死にした。

## (2) 岩下杜一(1888—1940)

- ・第一次世界大戦後にそれを知って宗教者(司祭)になり、昭和前期、戦時期に、哲学と神学と両面を語った。無教会主義をやめて、転向する若者が多かった。
- ・ライ病院の院長ともなったので、哲学方面は大きく展開しなかった。神学論が残る。
- ・40年頃満洲近辺にも行っようだが発病して、帰国後、亡くなる。
- ・哲学を智の全体性とする議論があり、これは、西周的な伝統の別次元での再構成ともいえる。
- ・ただし、天地を越えている。その哲学は、信と智との関係を前提にした、智の側からの哲学であって、その「自然的秩序と超自然的秩序」東大哲学会でおこなった講演記録は「完成論」「神国」「完成論」でもある。
- ・理性を信仰をどこまでも関係付ける真理論を展開している。当時理性が失われているとは見えたのだろう。
- ・彼の場合も、教会をもとにする社会論だともいえる。関東大震災の後で、寺社が壊れても高層ビルを喜ぶのはおかしい、と指摘している。

## 〔6〕敗戦後に発生した状態と課題

### (1) 「近代天皇像」β

明治期から昭和前期にまで展開するところの天皇像の拡大・拡張について、最近次の把握がある。

島藺進 2019 『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』 春秋社、2019. 5

島藺進 2019 『神聖天皇のゆくえ——近代日本社会の基軸』 筑摩書房、2019. 4

### (2) 「近代天皇像」α

これに対して、昭和天皇自体は、自分は、五箇条の誓文に関わるものだった、という。資料10：五箇条の誓文と宸翰戦後、和辻哲郎の非権力論、また石井良助 1951 『天皇 天皇の生成および不親政の伝統』がある。

### (3) 平成天皇また皇后の活動：

天皇は、戦後、キューカー教徒からの学習を受けており、その背後に先立ってだが新渡戸稲造からの流れがあった、といわれる。このあたりは環境問題にもなるだろう。

資料11：天皇人間宣言

地平・女性として、稲作からの祭祀を持ち続けられない再生し、またライ病・殉教論への関係を国を越えて広げ、その意味では、天人相関的な考え方が前提のようにあるともいえる。経済成長とも違う。

### (4) 敵味方供養、怨親平等

これは、国を超えた供養になって、近代以前にはあり、律令制の女性の働きをさらに展開するもの、ともいえる。

### (5) 「近代化」批判とその後、

最近、科学論から、戦時中さらに戦後・原子力にまでをとらえて次の指摘がある。

山本義隆 2018 『近代日本一五〇年——科学技術総力戦体制の破綻』 岩波新書

ただし、山本は「破綻」とするが、現在の主流政治家は、破綻と考えておらず、戦後のアメリカ依存をさらに行って同様に進むといい、と考えている。彼等は大日本帝国憲法賛成者である。

さらに高木仁三郎(1938-2000)は、そこに資本主義との結びつき戦後また拡大する「エネルギー」

所有問題をとらえる。

資料12：再生エネルギー 13 高木仁三郎著作とゆくえ

いずれにせよ、国家主義ではない、環境と結びついた社会形態の自立的な展開が歴史を帯びることが求められる。

### (6) 今後の課題

天皇は、稲作的な祭祀とも関係させるなら、また敵味方供養をも広げるなら、そこに意味が出て来るだろう。